



(公財) 国際宗教研究所 宗教情報リサーチセンター

20周年記念誌・国外

→デジタル版公開ページ <http://www.rirc.or.jp/20th/20th.html>

*印刷してご利用の際は2頁目以降を印刷して下さい。

西洋における禅の広がりの様相

藤井修平

はじめに

日本宗教に由来する言葉の中でも、「禅」はおそらく最も世界的に広まった概念である。英語圏では、この語はすでに日常単語として定着している。英語の健康雑誌『WellBeing』2012年138号には、「家庭での禅」というタイトルの記事がある。そこでは仏教については一切触れられておらず、家の中に「禅の場所」を見出すことは元気を取り戻すために何よりも重要であり、そのための方法として「あなたにとって特別な、自然の美しい場所に行くことです(Taylor-Kabbaz 2012: 47)」などの提案が述べられている。このような「禅」への言及はファッション誌、ライフスタイル誌、健康雑誌にしばしば登場する。それだけではなく、「アーバン・ゼン」というファッションブランドがあるかと思えば、化粧品会社のロレアルや資生堂は「Zen」と名のつく化粧品を販売している。さらに紅茶メーカーのタゾには、「Zen」という緑茶のブレンドがある。

日本研究者のジョシュア・イリザリーによれば、英語の「Zen」は現在では平穏、調和的、質素、ゆったりした、創造的、啓発的など実に多様な意味に用いられており(Irizarry 2015: 57)、そこでは元来の仏教的要素が切り離されている。このような禅の用法は、禅宗や禅の教えといった日本における通例からするとあまりに異なって見えるかもしれない。そのため、日本の「禅」と国外の「Zen」は別物だと考える人もいる。しかし、日本語にも脱宗教化された仏教用語が数多く組み込まれているのであり、なおかつこの2つの「禅」には歴史的な繋がりが存在しているのである。また、こうした日常単語としての禅だけではなく、仏教としての禅を実践する人々も国外には非常に多い。他方で、そのような「禅ブーム」が存在するからといって、日本の禅がそのままの形で国外で受け入れられていると考えるのも早計である。グローバル化するにあたって、禅にはさまざまな変化が起きている。

そこで、本稿ではなぜ西洋で「禅ブーム」が起こり、禅の概念が仏教の枠を

超えて広まるに至ったのかということの一つの問いとして、禅仏教が国外に展開した経緯と現状について概括的に論じる。対象となるのは、アメリカの仏教、ヨーロッパの仏教である。この主題は米国では 1990 年代から活発に論じられるようになったが、日本では田中ケネスなどごく一部の研究者しか着目していない。以下の議論では、これまでの主に国外の研究を参照しつつ、さらに本プロジェクトで得られた新たな資料を用いる。

本書が焦点にしているのは 21 世紀における日本宗教の国際的展開であるが、禅仏教の国外における展開についての日本における研究が少ないことに鑑みて、20 世紀までの展開についても、一定の頁を割くことにする。

1. 分析の視点：禅仏教の定義と分類

具体的な事例を取り上げる前に、この主題を扱う際の基本的な視点を提示しておきたい。まず対象とする「禅仏教」についてだが、これは日本の禅宗の宗派および、その教えを受けて作られた独自の団体の双方を指すものと定める。すなわち、曹洞宗、臨済宗、黄檗宗以外の活動も対象に含めることになるが、西洋における仏教の多様な活動を把握するには、このような視点が必要になる。

次に仏教の分類についても、西洋仏教の特徴を理解しやすくするために、宗派とは別の分類方法を提示する。第一のものは「改宗仏教徒」と「民族仏教徒」という区分である。前者はそれまでは仏教徒でなかったものの自ら仏教に改宗した人々を指しており、主に白人や黒人の仏教徒がそうである。後者はすでに仏教徒であった人々で、アジア諸国からの移住者が主である。この 2 つは同じ宗派の内に共存しうるもので、1 つの寺の中でも、改宗仏教徒と民族仏教徒は別集団のように異なった活動をしていることもある。

これに対しジャン・ナティエは、仏教の持ち込まれ方に着目して「輸入」「輸出」「手荷物」の 3 つに分類することを提案している (Nattier 1998 : 189)。輸入とは西洋人が他国から仏教を取り入れるという動きを指し、エリートの仏教とも呼ばれる。輸出とは開教師などによって東洋から西洋に仏教が広められることで、キリスト教になぞらえて福音的仏教と呼ばれている。手荷物は前述の民族仏教徒が、移住の際に自らの仏教を持ち込むことである。他国への宗教の広まりというと宣教師が熱意を持ってその国に赴き、現地で布教するというこ

を第一に思い浮かべがちだが、それは3つある広まり方の1つにすぎず、その他にも自ら望んで取り入れる例や移民の宗教が存在するのである。

こうした分類に加え、西洋において仏教徒とは何かについても触れておくべきだろう。新年は神社に初詣に行き、葬式は寺院で行うといった日本人の典型的な宗教性と似て、米国やヨーロッパでも仏教徒である・仏教徒でないという2つの状態の間に明確な区切りは存在しないと言われている。無論曹洞宗の受戒などの仏教徒となるための儀礼は機能しているが、「準仏教徒」とでも言えるような仏教に関心のある人々がはるかに多く存在している。また同時に、仏教は実践しているがキリスト教を捨てるわけではないという「掛け持ち」を行う例もしばしば見られる。こうした人々に対しては、仏教への「同調者」と呼ぶことが提案されている。

その典型例が「ナイトスタンド仏教徒」である。ナイトスタンドとはベッド脇のテーブルのことで、ここに仏教解説書を置き、寝る前の時間にそれを読んでから寝るということを日々行うので、このように呼ばれる (Tweed 1999 : 71-90)。そうした人々は誰かに教を乞いに行くことはあまりないが、熱心に仏教を学んでいることもまた事実なのである。この状況は、宗教の教義や実践が混ざり合うシンクレティズムとは異なり、1人の実践者が状況によって別の宗教を使い分けているものである。それはむしろ、消費者が宗教を自由に選択するというロドニー・スタークの「宗教市場」の見方に合致しているといえる。総じて、現代西洋における仏教を含めた宗教アイデンティティは、単一ではなく多重化していると見ることができる。

以下では、21世紀における禅仏教の展開を論じる前に、その展開の把握に必須と思われる禅仏教の普及の歴史を概観する。これにより、なぜ現在このような形で海外に禅仏教が存在しているのかが理解できるだろう。

2. 禅仏教の普及の歴史

(1) 戦前における米国

仏教と西洋文化の出会いはさまざまな時代に行われているが、禅仏教の場合においては、1893年のシカゴ万国宗教会議がその端緒だと考えられている。この会合でとりわけ耳目を集めたのが臨済宗の釈宗演の演説であった。宗演

は 1905 年に再度米国に渡ったが、その際には円覚寺における彼の弟子である鈴木大拙と千崎如幻が帯同した。大拙はそれ以前から哲学者ポール・ケーラスとともに働き、仏教の著作の翻訳を行っていた。千崎は十数年現地で働いた後、30 年代末にサンフランシスコとロサンゼルスに禅センターを開設、禅を教え始めた (Prebish 1979 : 6)。

同じく宗演の弟子である釈宗活も 1906 年に米国に渡り、禅の修行場である兩忘協會の支部を設立した。宗活の帰国後は彼の弟子で曹溪庵の号で知られる佐々木指月が指導を引き継ぎ、ニューヨークで 1930 年に米国禅協会 (後の第一禅堂) を設立した。しかし程なくして世界は第二次大戦へと突入し、太平洋戦争が開戦すると、米政府は仏教を含む日本文化を危険視し、米国在住の日本人や日系人は逮捕され、収容所に送られた。千崎と佐々木も終戦までを収容所で過ごした。

ここまで記述したのは前述の分類の「輸出」つまり日本からの国外への伝道の流れだが、同時期には「手荷物」つまり仏教が移民とともに移動したケースも存在する。戦前の日本移民の向かった先は、主にハワイとブラジルであった。ハワイへの移民は 1868 年より行われ、曹洞宗からは最初の僧侶として河原仙英と菅良雲が渡布した。彼らは 1903 年にワイパフ太陽寺とカウアイ禅宗寺を、翌年にワヒアワ龍仙寺を開き、菩提供養を行うとともに移住者の要望により 2 世、3 世に向けて日本語教育を行った (SOTO 禅インターナショナル 2014 : 6)。米本土への曹洞宗の伝道は、1915 年のサンフランシスコでの世界仏教徒大会に日置黙仙と山上曹源が代表として出席したことを端緒とする。1926 年には米本土初の曹洞宗寺院である禅宗寺が開かれ、在留日本人のために青年会や日本語学校が運営された (常光 2009 : 155-157)。

同じく南米においても日本人の移民は進められたが、最初の集団移民は 1899 年に 790 人がペルーに上陸したものであった。曹洞宗の上野泰庵が次の移民団とともに到着すると、彼は 1907 年に慈恩寺を創建した (仏教タイムス 2003/2/13 : 1)。同寺では複数の宗派の檀家が協力して運営を助け、彼らは布教よりも過酷な労働で亡くなった者への儀礼を何より求めたため、慈恩寺は先人の慰霊施設とみなされるようになったという (仏教タイムス 2003/2/20 : 1)。ブラジルでも 1895 年の修好通商航海条約の締結以来移民が進んだが、次第に

同地では日本人は単なる労働力としてではなく、近代化に成功した模範的な「アジアの白人」として理解されるようになった（Rocha 2006：29-30）。米国と同様仏教僧も移民とともにブラジルへ渡ったが、戦後まではその活動は小規模であった。その理由としては、移民たちがいずれ日本に帰国すると考えており、即席の供養しか行っていなかったことや、現地での偏見を避けるために多くの移民がカトリックに改宗していたことが挙げられる（Rocha 2006：32-34）。しかし戦後になると移民の生活環境が改善され、寺院設立の要望が出始めたため1955年にサンパウロ近郊に禅源寺が開かれ、59年には南アメリカ布教総監部が設立された。

(2) 戦後の米国における禅ブーム

太平洋戦争が終戦を迎えると、日米の交流も再開され、禅も再び米国で教えられるようになる。そしてこの時期から、日本人による仏教の「輸出」だけではなく、米国人による「輸入」も活発化し始める。以後の時代の米国への禅の導入は、大まかに50年代の「ビート禅」、60年代の実践中心の禅への転換、そして70年代以降の安定した拡大という3つに分けることができる。以下では、それぞれの時期に起こった出来事と時期ごとの特徴を簡潔に記述する。

終戦から間もない1950年代において、米国仏教の広がりには大きな影響を及ぼしたのは鈴木大拙である。彼は1949年に再び米国に赴くと、コロンビア大学などで仏教の講義を行う傍ら、多数の著作を著した。千崎の友人であった臨済宗の中川宗淵も同年に米国に渡り、神智学協会などで講演を行った（Fields 1992：199-200）。それまで活動していた今北洪川系列の僧に加え、この時期にはまた別の系譜からも禅を伝えに米国へ赴く人物が現れる。安谷白雲は曹洞宗の原田祖岳の下で嗣法を受けたが、師に倣い臨済宗の公案も同時に学んだ。彼は後に曹洞宗から独立し三宝教団を興し、1962年に米国に渡った。また前角博雄は安谷と同様に曹洞と臨済双方の教えを学んだ後に1956年に渡米し、ロサンゼルスに禅センターを開いた。

こうした活動、とりわけ大拙による禅の紹介は、米国で一定の層の支持を得ることとなる。それは主に詩人や作家など、芸術に携わる人々であった。その理由は、何より彼らがアメリカの成功神話やプロテスタント的な勤勉さ、清廉

さといった支配的な価値観に嫌気が指しており、その代替物を求めていたからだとされる (Prebish 1979 : 6)。そしてある種のオリエンタリズムないし「東洋の神秘」として示される禅は彼らの目にはきわめて魅力的に映った。そうした「ビート世代」による 50 年代の禅の受容は、「ビート禅」と呼ばれ、哲学者のアラン・ワッツや詩人のゲイリー・スナイダー、作曲家のジョン・ケージに代表される。

続く 1960 年代の最大の変化は、曹洞宗の僧侶による非移民の米国人に対しての指導が本格的に開始されたことである。その原動力となったのが鈴木俊隆であった。彼は永平寺で修行を終え 1959 年に渡米、サンフランシスコ桑港寺の住職となった。俊隆はとりわけ非日系人に対して指導を行い、サンフランシスコ禅センターやタサハラ禅マウンテンセンターを開設したが、そうした活動により桑港寺の日系人との間で対立が生じ、1969 年に同寺を去ることとなった。彼の教えでは何よりも坐禅を重視し、そのことはこれまで知識人の中での思想という理解が主であった禅を実践中心の形態へと転換するきっかけとなったと言われている。彼の他には、嶋野栄道や佐々木承周、松岡操雄がこの時代に米国に渡っている。

こうした日本人禅僧だけではなく、この時期には初期の米国人の弟子たちも修行を終え、各地で新たに禅を教え始めている。ロバート・エイトケン は日本の円覚寺や龍沢寺で禅を学んだ後にハワイに禅堂を開き、ダイヤモンド・サンガとして活動を始めた (Tworkov 1994 : 27)。またフィリップ・カプローは大拙のコロンビア大学での講義を聞いたのがきっかけで 1953 年に日本に渡り、龍沢寺で修行を始めた。その後原田や安谷にも学び、1966 年にロチェスター禅センターを開いた (Layman 1976 : 66-67)。

プレビシュは、60 年代の米国社会における禅の受容を、ベトナム戦争への反戦運動と並行するカウンターカルチャーやヒッピー運動と結び付けている。50 年代と同様、キリスト教をはじめとする既存の伝統への反発という流れで禅も受け入れられていった。それでも、単純に 50 年代の延長ではない側面も見られる。それは、「米国仏教寺院の建立やそこで行われる儀礼生活を通して、聖なる中心が米国へ移された (Prebish 1979 : 37)」ことである。すなわち、これまで仏教の中心はアジアにあり、禅の場合はそれは日本であったが、この時期

に米国に寺院が開かれ修行が可能となったことで、より禅が身近となり、在俗修行者も大幅に増加したのである。

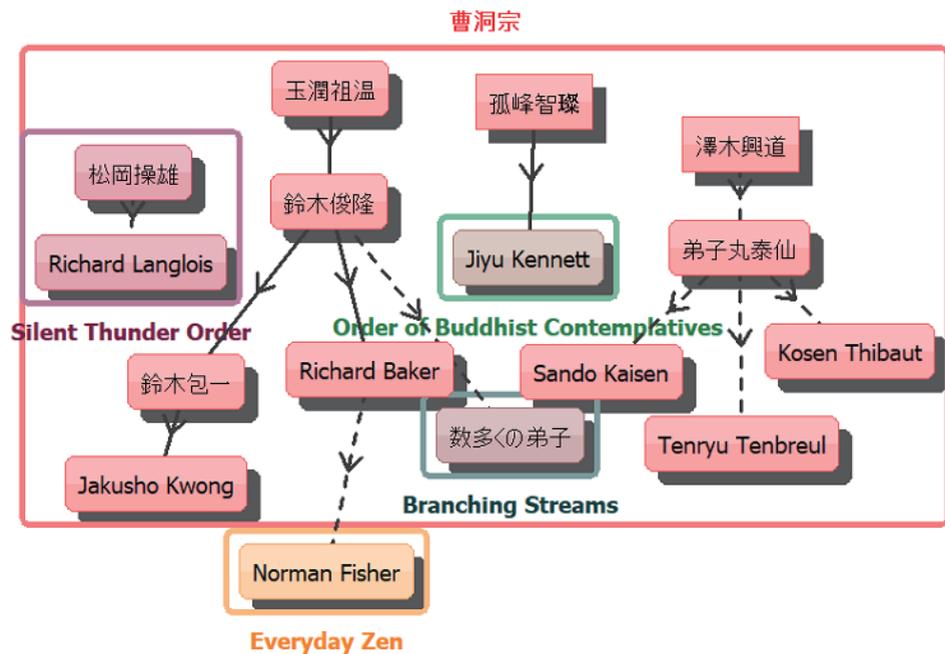
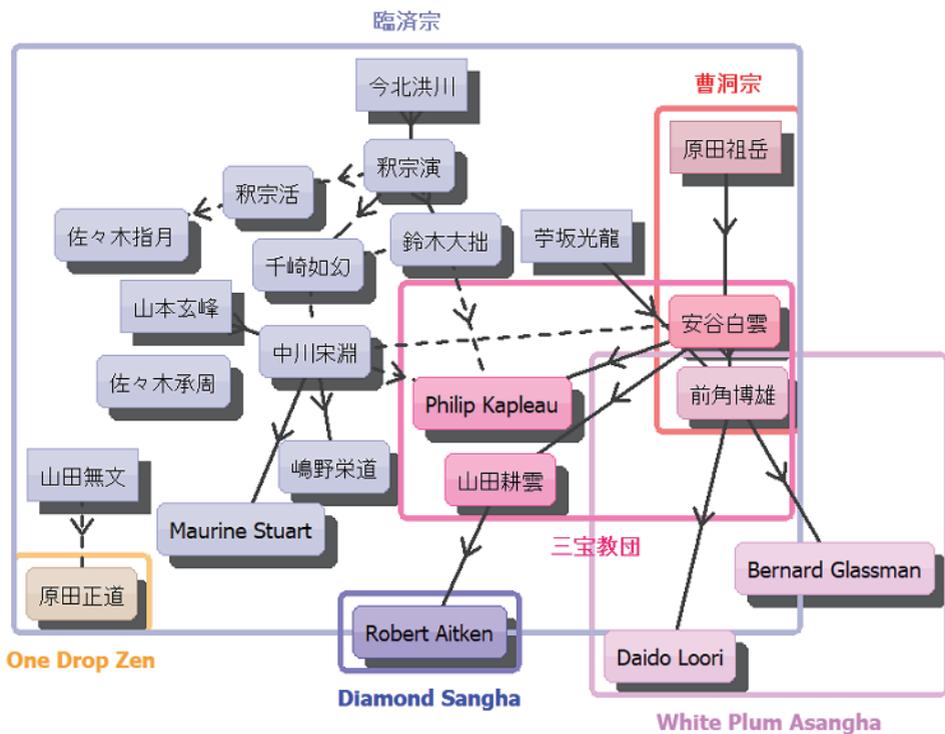
70年代に入ると、それまでのブームは落ち着き、各組織もより伝統的な活動に向かうようになる。この時期にもますます多くの米国人が修行を終え、指導者の立場に就くようになった。バーナード・徹玄・グラスマンは前角の下で修行を始め、1979年に禅コミュニティニューヨークを開いた (Tworkov 1994 : 27)。同じく前角の嗣法者で、「マウンテンズ・アンド・リバーズ・オーダー (山川教団)」を率いるローリー大道は、1980年に創立された禅マウンテンモナストリー・道真寺を拠点としている (岩本 2010 : 18-19)。また英国出身の法雲慈友ケネットは曹洞宗總持寺で修行を行い、その後1970年にカリフォルニアの山中にシャスタ・アベイを開いた (Batchelor 2011 : 131-133)。さらに、鈴木敏隆のサンフランシスコ禅センターはリチャード・ベイカーが正式に継承したが、それ以外の弟子たちも各地に広がり、「ブランチング・ストリームス」と呼ばれる繋がりの下に禅堂を開いている。ここまでの両宗派の系譜を図示すると、次頁のようになる。

このように、70年代には初期に修行を始めた米国人が指導の許可を与えられ、新たに禅堂を開く例が増えてくる。この傾向はその後さらに顕著になり、米国における禅堂開設は90年代にピークを迎えることになる。そしてそれに伴い、社会全体への禅の普及がますます進行していった。1994年には、『ニューズウィーク』『USA トウデイ』『ウォールストリートジャーナル』などの米国の主要メディアがこぞって米国の仏教を取り上げている (Prebish 1998 : 1-2)。

(3) ヨーロッパ

ヨーロッパにおいても、現在では至る所で禅が実践されているが、その広がりへの過程は米国とは幾分異なっている。その主な理由は、20世紀後半に至るまで日本からの移民も開教の試みもほとんど行われなかったからである。

禅のヨーロッパへの本格的な導入は、1967年に曹洞宗の弟子丸泰仙がフランスへ渡り、曹洞宗ヨーロッパ開教総監となったことで始まった。禅僧となる以前は実業界の人間であった弟子丸は、總持寺の澤木興道に師事した後、ヨーロッパ開教を志してパリへ赴いた (中外日報 2013/6/25 : 12)。同地で彼の教



える禅に最初に興味を示したのは、米国と同様に芸術家や知識人たちであった（中外日報 2013/7/11：12）。その後彼は 1970 年にヨーロッパ禅協会（現在の国際禅協会）を設立し、79 年には仏中部ブローア市近郊の邸宅を入手し、「禅道尼苑」と名付け本格的な修行を開始した（中外日報 2013/7/25：12）。

弟子丸は 82 年に没するが、彼の弟子たちはヨーロッパ各地に広がり、次々と道場を開いていくことになる。主な人物としてルトガー・テンリュウ・テンプロイル、ステファン・コウセン・ティボー、サンドウ・カイセンがいる。テンプロイルはドイツ禅協会の代表を務め、シェーンベッケンの寂光寺で教えている。ティボーは「コウセンサンガ」を率い、フランスやアルゼンチンで活動している。カイセンは最も活動的な人物で、主に東欧に禅を広めている。彼の開いた禅堂はフランス、ポーランド、チェコからロシアにまで多数存在する。

(4) その他の地域

この他に禅が伝わっている地域としては、ブラジルとイスラエルが挙げられる。前述のようにブラジルでは 1950 年代に初めて曹洞宗の寺院が設立されたが、西洋全体の禅への関心の高まりとも合わせ、この時期から日系人以外にも寺院を訪れるようになる。最初の広まりは他と同様に知識人の間におけるもので、禅はとりわけ先進的な人物が関心を持つ「高級文化」として受け入れられた。そして社会問題や既存の文化への不満の解決手段としての禅が大衆へと広がっていくが、ブラジルに特異な状況としては、複数宗教の共存と混淆が進んでいる点がある。クリスティナ・ホシャはこれを「クレオール化」と呼んでいるが、彼女はこれが「正しい」宗教が歪められていく過程ではなく、人々の関心に合わせて新たな形態が創造される過程だと強調している（Rocha 2006：17-18）。

イスラエルにおいても、禅の影響が見られる。その前提として、米国における「禅ブーム」の担い手の多くがユダヤ人であるという事実が存在し、米国仏教徒の 3 割がユダヤ系だと言われている（Obadia 2002：178）。50 年代のカウンターカルチャーの時代にユダヤ人仏教徒が増加しただけではなく、近年ではユダヤ教の内部に仏教由来のマインドフルネスを取り込んだ「ユダヤ教マインドフルネス」も生まれている（Niculescu 2015：143）。同国においてはアジア系移民の仏教導入は行われなかったが、中川宗淵が 60 年代に「キブツ寺」

を創立している。その後90年代にティク・ナット・ハンのプラムビレッジや韓国の観音禅などが導入されるが、それと並んで曹洞宗や臨済宗の禅道場も開かれている。現地で生まれたグループとしてはテルアビブ大学内の「サンド・サンガ」が存在する (Obadia 2002 : 182-183)。

この2国に限らず、実践の度合いや主流となっている宗派の違いは存在すれども、西洋文化圏においては概念としての「禅」は等しく広がっているといえるだろう。ここで言及した以外の国々としてはオーストラリアやニュージーランド、カナダ、南アフリカが挙げられる。

3. 海外禅仏教の活動内容

禅仏教が広がるに至った歴史は以上の通りである。次に、21世紀の資料を参照しながら、海外における禅仏教の現状と、そこで起きている変化について述べてみたい。

まず、寺院や禅センターで行われている活動内容について把握を試みてみよう。そうした活動は日本におけるものとは大きな差異が見られ、それは日系寺院も禅センターも同様である。前者については『曹洞宗海外日系寺院史』を参照すると、それぞれの日系寺院では坐禅や写経、法要に加えて茶道、華道、書道、俳句、日本語教室、民謡教室、バザー、カラオケ教室など実に多岐にわたる活動が行われている。また、キリスト教に倣って日曜日に信徒が集まり、読経を行い聖歌を歌う「日曜法要」ないし「日曜礼拝」が行われているのも国内寺院との差異である。またハワイの寺院では、盆踊りが寺院境内で3ヶ月にわたって行われ、「人種を超えたハワイの風物」になっていると伝えられている (吉田 2009 : 9)。浅井とウィリアムズによる曹洞宗日系寺院の研究によると、寺院は法要や坐禅会の実施に加え、地域の日系人が集まるコミュニティセンターとしての役割も果たしていると述べられている (Asai and Williams 1999 : 25-29)。

他方で、寺院での活動への参加者の分裂も見られる。ある報告によるとロサンゼルス禅宗寺では日系米国人が95%を占めているが、坐禅グループの中では日系人は1割のみで、残りは非日系人であり、ほとんど5%の非日系人のみが坐禅に参加していることになる。このような状況はアジア系の米国仏教とヨーロッパ系中心の米国仏教の間の並立関係を表している (Asai and Williams

1999：30)。「ヨーロッパ系の米国禅センターが仏教研究と禅の実践に重点を置いているのに対し、日系の米国禅寺院は葬儀と文化活動を中心としている(Asai and Williams 1999：28)」のである。前述のホシャもブラジルの一つの寺院内で、日系人と白人が別々のグループに分かれて活動する様子を伝えている。

次に、非日系人が集まる禅センターの活動を描写してみよう。彼らが座禅と仏教の学習にとりわけ関心を持っていることは述べたが、センターで行われていることはそれに尽きるわけではない。岩本明美の記述によると、ローリー大道の禅マウンテンモナストリーでは、出家者、在家修行者、門下生ではない一般人のそれぞれが参加可能なプログラムを有している。基本となる活動は、「禅の八門」と呼ばれ、坐禅、独参、学問研鑽、日常儀礼、正しい行動、芸術プラクティス、身体プラクティス、労働プラクティスからなる。このうち、正しい行動では刑務所訪問や環境保護などの社会貢献活動が、芸術プラクティスでは伝統的な禅芸術および西洋美術の学習が、身体プラクティスとしては日常的な立ち振舞いを律することに加え弓道や太極拳が、労働プラクティスでは作務にあたるさまざまな仕事が行われている。

一年を通しては、90日の安居が年2回、3日間の入門プログラムが毎月、訪問者向けのプログラムが週2回に加え、一週間の摂心プログラムも開かれている(岩本 2010：19-21)。次に前角の開いたロサンゼルス禅センターは、曼荼羅と呼ばれるカリキュラムを刊行している。それによると、活動は5種類に分類され、「源」には坐禅が、「学習」には読書が、「奉仕」には食料の寄付や環境教育、宗教間対話が、「関係性」には話し合いや作務が、「資源」には法要などの儀礼が含まれる¹⁾。またグラスマンのグリーンリバー禅センターでは、坐禅や作務などの日常活動に加え、社会活動として介護者への補助、ボランティア、『甘露門』による施餓鬼会が行われている²⁾。また、刑務所収監者の多い米国において、複数の宗派が刑務所での教誨活動を盛んに行っている。どの教団も、常に何らかの外部に向けた社会活動を行っている点は特筆すべきだろう。

これらに対し、ヨーロッパの寺院における活動は比較的寺院内に限られているようである。禅道尼苑のリトリートでは坐禅や経行、作務および袈裟を縫う活動が行われ、訪問者向けのプログラムとして家族や初心者用の摂心および「金の指」などのテーマ別リトリートが行われている³⁾。他の集団でも内容はこれ

に近く、サンドウ・カイセンのプラハの道場では、坐禅が経品を挟んで1時間行われ、その後般若心経が唱えられる⁴⁾。臨済宗のワン・ドロップ・ゼンに属する北欧山曹源寺の禅堂では、朝課に始まり、坐禅、作務、夜坐といった日常である⁵⁾。

三者を比較すれば、日系寺院は日本文化の学習や集会などの活動を特徴とし、米国非日系寺院は社会活動による外部に開かれた関係性の構築を行っており、ヨーロッパの寺院は寺院内での修行に集中しているといえるだろう。その場合でも、メンバーでない参加者が体験できるプログラムが用意されている。

4. 海外禅仏教徒の全体像：どこで、誰が、なぜ

(1) 寺院・禅センターの分布

次に、世界各国の禅の広まりについての全体像の提示を試みてみよう。まずは寺院および禅センターの数だが、本プロジェクトで作成した寺院リスト（本書デジタル版に掲載）を参照すると、住所が確認できるもののみでも500以上に及び、国別では米国、フランス、ドイツ、スペイン、イタリアの順となる。人口の規模を考慮し、人口に対する寺院・禅センターの比率を出してみると、多い順にスイス、米国、ベルギー、ラトビア、チェコとなる。また、地図から地理的な広がりを見てみると、米国では西海岸とりわけカリフォルニア州がもっともセンター数が多く、東部においてもまんべんなく分布している。ヨーロッパにおいてはフランスを中心に広がっているが、東欧でのサンドウ・カイセン系列のセンターの存在も目を引く。グループ別の統計では、曹洞宗に公認された寺院と国際禅協会所属のものが4割近くを占めるが、それらに次いで前角博雄のホワイトプラム・サンガ、鈴木俊隆の弟子によるブランディング・ストリームス、サンドウ・カイセン系列、ダイヤモンド・サンガ、ワン・ドロップ・ゼンが寺院・禅センター数において上位である。曹洞宗と臨済宗で分けて考えるならば、それぞれ曹洞系が約350、臨済系が約50、そして安谷白雲に端を発する、両者の教えを合わせたグループが約100の拠点を有している。

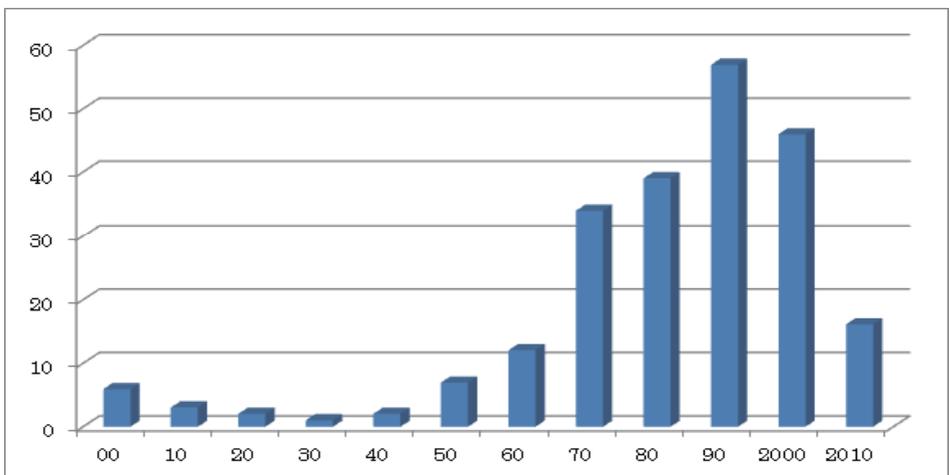
加えて本調査では、文献や公式サイトの情報から各寺院・禅センターの開設年についても可能な限り調べ、その広がる様子を把握できるようにした。開設年が明らかになっている225の拠点のうち、10年単位で区切るならば、もっ

とも開設数が多いのは1990年代の57件で、次いで2000年代、1980年代、1970年代と続く（グラフ参照）。

古い順に見てみるならば、戦前には米国ではハワイの寺院とサンフランシスコ桑港寺、北米別院禅宗寺しか存在せず、その他にはシンガポール日本寺、ペルー慈恩寺のみである。50年代も変化はほぼなく、60年代になるとカリフォルニア州に発心寺、禅心寺、禅宗寺、臨済寺などが現れ、東部にも嶋野栄道によるニューヨークの正宝寺や、フィリップ・カプローによるロチェスター禅センターが開かれる。そして70年代には米国西海岸と東部において30箇所近くの禅センターが生まれ、2000年代まで同程度の割合で増加していく。この様子は米国における禅ブームの実態を端的に表しているといえるだろう。80年代に入ると今度はヨーロッパでのセンター開設が行われはじめ、90年代、2000年代と着々と数を増している。それ以降の状況は現状ではまだ明らかになっていないが、2018年に臨済宗光林禅寺が米国ウィスコンシン州に開設されるなど、決してこの流れが止んだわけではない。

(2) 各国の仏教徒数

グラフ 寺院・禅センターの開設数



続いて禅の実践者の実数について把握を試みてみたい。西洋における仏教徒については一定数の調査が存在しているが、ほとんどが仏教徒全体を包括した数字となっている。アジア系移民と非移民で分けられているものもあり、非移民のほとんどが改宗者で、改宗者の多くが禅宗系であることを考えると、より実態に近い数字を得ることができる。まず米国に目を向けると、2014年のピュー・リサーチ・センターによる調査では仏教徒の割合は0.7%つまり約223万人であり、そのうちアジア系は33%なので、残りのおよそ150万人が改宗仏教徒となる⁶⁾。ここには禅宗に加え、ベトナム仏教、チベット仏教、上座仏教への改宗者も含まれている。加えて、米国では寺院や禅センターとそこまで深い関わりを持たない「同調者」も多数存在していると述べたが、ケネス田中はこの数を250万人と見積もっている。さらに彼によると、ある調査で仏教から重要な影響を受けたと答えた人の割合は12%に及び、人口にすると約2,500万人になるという(タナカ 2010: 26-27)⁷⁾。次にヨーロッパ文化圏の仏教徒数については、バウマンによる1990年代末の推計が存在する。多い順にフランス35万人(非アジア系5万人)、オーストラリア20万人(同3万人)、英国18万人(5万人)、ドイツ17万人(5万人)、イタリア7万5千人(5万人)で、カナダとブラジルは非アジア系の数は不明ながらそれぞれ30万人、35万人の仏教徒がいるとされている(Baumann 2001: 21)。ヨーロッパ全体での非アジア系仏教徒は25万人である。またバウマンは各国の宗派ごとの割合も掲載している。それと上記の仏教徒数を掛け合わせると、禅を含む大乘仏教徒はフランスではおよそ19万人、ドイツ6万人、英国3万人となる(Baumann 2002: 94)。ブラジルにおいては、2000年の統計では仏教徒は全人口の0.15%にあたる約25万人とされている(Rocha 2006: 95)。一方日本側の統計では、『寺門興隆』の2012年の調査によると、曹洞宗は約2万人の海外信徒が存在する。臨済宗妙心寺派は海外信徒の統計は取っていない(2012: 49)。

(3) 仏教徒の特徴

次に、単純な数のみを記すのではなく、そのように禅を実践している人々は、どのような人物なのかについても記述してみよう。禅宗の日系移民についてはデータが少ないため以下では改宗仏教徒に対象を絞る。レイマンが70年

代に行った調査では、前角博雄の開いたロサンゼルス禅センターなどから、いくつかの質問に対する解答を得ている。まず参加者の年齢は、中央値が28.32歳と若めである。男女比は男性が76%を占めるが、これは他の米国仏教グループに比べると男性に偏っている。また4割が既婚者で、同じく4割が子供を持っている。そして極端なことに、98%が白人である。それまでの宗教的背景は、28%がユダヤ教で12%がカトリックと、どちらも国全体の平均よりも高い。職業は半数が大学生で、残りは比較的高収入の職に就いている(Layman 1976: 254-258)。

これらの特徴からは、大学の授業が仏教への入り口になっていることや、若い知識人が積極的に参加していることがうかがえる。より新しいデータとしては、コールマンが1999年に発表したものがあるが、これは他宗派も含んでいる。それぞれ禅が2、密教2、上座部2の施設に通っている359人に対する調査で、まず男女比は女性が57%と、男性を上回っている。年齢の平均は46歳で、白人が非常に多く、中流から中上流の階級に属していて教育水準が高い参加者が大多数である(Coleman 1999: 94-95)。ここからも、「高級文化」としての禅というイメージが見えてくるだろう。実践に関しては坐禅を含む瞑想が中心で、毎日40分程度の瞑想を行うのが平均である。瞑想は自宅で行う他、坐禅会のような集中的なリトリートにも参加している。63%は仏教書を「頻繁に」読み、32%は「時々」読んでいる。加えて、回答者の34%が何らかの武術を習っているという点も興味深いだろう(Coleman 1999: 96-97)。

(4) なぜ禅を実践しているのか

最後に、人々は何に惹きつけられて禅を学びにやって来るのかという疑問に答えることを試みてみよう。禅の普及の歴史を記述してきた中で、いくつかの回答はすでに与えられている。すなわち、米国の50年代においては禅はまったく未知な「東洋の神秘」として芸術家たちに魅力的に映り、同時に既存の、抵抗すべきキリスト教文化の反対物としてカウンターカルチャーの一部となった。それに加え、禅の哲学としての側面やセラピーとしての側面、坐禅が何らかの特異な体験をもたらしてくれる面なども注目されるようになる。この点について論じたレイマンは、仏教徒となる理由として、移民の「家系的・文化的

親和性)、キリスト教より優れたものとしての「知的・科学的アピール」、「病んだ社会の合理的治癒」、「美観とシンボリズム、秘教性」、神に頼らない「自力救済」、「日常の超克」、「エスタブリッシュメントへの反発」、「苦からの助け」、「より充実した人生への欲求」、「真理の探求」を挙げている (Layman 1976 : 264-270)。

またマクマハンによると、東洋の迷信というイメージから脱却するために釈宗演が行った合理的宗教としての仏教の提示や、大拙が仏教の本質をなす神秘主義的要素として禅を描写したことが、西洋社会を覆っていた意味の喪失への解決策となり、信仰よりも経験を重視する状況に適合したと語られている (McMahan 2002 : 219-222)。また、前述のコールマンの調査結果では、仏教に興味を持ったきっかけとして、武術に加えドラッグが挙げられている。ドラッグは 60 年代以降は排斥が進められたものの、LSD などの薬物を摂取して修行を行うものも多く、改宗仏教徒の 63% がドラッグを使用したことがあり、その半数はドラッグが仏教に魅力を感じる要因になったと答えている (Coleman 1999 : 96)。これはすなわち彼らは薬物の代わりに仏教の体験を求めたということである。

5. グローバル化に伴う変化

(1) 活動の変化

禅仏教の普及から理解する限り、グローバル化というのは日本から持ち込まれたものが外国で歓迎され、そのまま受け入れられるという単純な「輸出」の過程ではない。そこでは多くの衝突が発生し、その解決のためには禅の側もまた変化することが必要だった。以下では禅仏教の広がる過程で起こった問題と、それに伴う変化について分析してみよう。

第 1 に看取される変化は、その活動内容に関するものである。大まかに分類するならば、書道や俳句、日本語教室など日本文化に関する活動、刑務所訪問やボランティアなどの対外的社会活動、およびさまざまな理由で禅と結び付けられた活動の 3 つに分けられる。前 2 者についてはすでに詳述したので、ここでは最後のものについて触れよう。さまざまな理由で禅と結び付けられた活動とは、日本の禅仏教由来の活動とも、日本文化の共有とも言えないにもかかわ

らず行われているもので、具体的には健康のための運動ないし武術、菜食主義の実践などがある。禅と健康との関連性はとりわけ心理学者が着目したもので、心身双方の健康維持の役割が期待されているといえる。上座仏教の瞑想を取り入れたマインドフルネスは、そうしたセラピー的側面を推し進めた代表例である。運動は「禅フィットネス」などとして一般のトレーニングジムで行われることも多いが、タサハラ禅マウンテンセンターでは「心身リトリート」として運動やヨガを含んだ健康プログラムを有している。武術も禅センターとの結びつきが強く、典型例としてギリシャのアテネ禅センターではテコンドー、ヨガ、居合、合気道が行われている⁸⁾。

なぜ武術が仏教施設で教えられるようになったのかについては、一つはそうした施設が「アジア文化センター」としての役割を果たしているからである。もう一つの理由としては、禅と武術に共通する精神性が強調されているためと考えられる。とりわけ大拙は、禅を「侍の技芸」として提示し、かつ日本的な精神性を表現するものとした。それゆえ居合や合気道とはその精神性の面で共通点を有しているのであり、そうした武術にも「禅の心」が存在していると言われる。こうして、武道を習う人がその根底にある哲学として禅に興味を抱くことになるのである。こうした運動の実践は西欧系寺院に限らず、日系寺院においても禅宗寺ではエアロビクス、桑港寺では少林寺拳法が行われている。

菜食主義に関しては仏教と無関係とは言えないが、とりわけ米国ではさまざまな食の改善運動と仏教が結び付けられた。その一例がサンフランシスコ禅センターから派生したグリーンガルチ農園である。これは鈴木俊隆の後継者リチャード・ベイカーが設立したものであり、修行を行いつつ有機野菜を育て、周辺のレストランへの販売も行った (Tworkov 1994:229)。ベイカーはその後、菜食レストラン「グリーنز」を都市部に開店してもいる。これらは事業の類であり、当時から批判がないわけではないが、この他にも菜食主義を求める白人修行者は多い。その理由は、一つは禅とカウンターカルチャーや牧歌的なヒッピー文化が結び付けられているためだが、もう一つは、仏教がキリスト教とは異なり自然を蔑ろにしない宗教だと考えられているためである。「仏教は自然やすべての感覚をもつものには仏性があり、聖なるものだとみなしている。ある大学講師の実践者は、カトリックを地球の破壊と関係づけ、仏教の自然に対す

る態度が彼女がカトリックを離れ仏教徒となった理由の一つだと語った (Rocha 2006:118)」と述べられているように、仏教は自然に優しい宗教だというイメージが存在し、それが仏教を選ぶ理由ともなっているのである。

(2) 組織形態の変化

第2の変化は、組織形態の変化である。これは西洋に禅が伝わったまさに初めから起こっている。というのも、西洋への布教の道筋が、日本の各宗派が制度化したそれとは大きく異なっているためである。前述の通り米国の禅の大部分はさまざまな日本人および米国人によって広められた。彼らは禅堂ないし禅センターを各地に開き、そこで後継者を育てていった。その結果、多くが日本の曹洞宗や臨済宗の管理下から離れることになった。桑港寺から分かれた鈴木俊隆のサンフランシスコ禅センターがその一例である。これらの海外施設の中には曹洞・臨済宗の寺院として公認されるものも増えてきているが、現地では同時に新たな教団の設立や二宗派からの独立が進んでいる。その典型が曹洞宗から独立した三宝教団であるが、それに加えこれまでに見てきたように米国ではエイトケン、カプロー、ローリー、グラスマンなどがそれぞれ異なる集団を名乗っている。これらは宗派というよりはメンバーとしての所属という形態をとっており、禅マウンテンモナストリーが山川教団に属し、かつホワイトプラム・サンガにも含まれ、曹洞宗の寺院としても登録されているなど、所属関係は重複が可能となっている。

ヨーロッパの各施設はそのほとんどが弟子丸の流れをくむが、彼の1982年の没後、正統をめぐる対立があったことが伝えられている。フランスの門弟は永平寺の丹羽廉芳より嗣宝を受け、国際禅協会を引き継いだ。東傳寺の成田秀雄より嗣宝を受けたイタリア、ドイツ、スペインの門弟はそれぞれの国で個別に禅協会を設立するに至ったという (五十嵐 2005:11)。国際禅協会はその後日本の曹洞宗との繋がりを回復し、2002年には、弟子丸の没後20年間不在だったヨーロッパ開教総監が新たに赴任し、総監部が再開された (仏教タイムス 2002/7/11:1)。また2007年には、フランスの禅道尼苑内に国外初の教師養成道場である宗立専門僧堂が開単された (仏教タイムス 2007/10/4:3)。他方で各国の禅協会は、ベルリンの禅光寺など一部は曹洞宗の寺院として認可

されているがすべてではなく、国際禅協会に所属していない寺院も多い。

(3) 組織内の問題とそれへの対策

米国では 60 年代以降、各地の指導者の下での修行が広く行われるようになったが、80 年代に入るとそうした組織内での問題が相次いだ。最大の事件は、サンフランシスコ禅センターにおいて鈴木俊隆に嗣法を受け正式な後継者となったリチャード・ベイカーが、1983 年に弟子たちから不倫と金銭問題で告発を受け、追放されたことである (Tworkov 1994 : 229)。同様のスキャンダルは嶋野栄道の下やチベット仏教のグループでも発覚し (Tworkov 1994 : 188-190)、社会問題となった。こうした事件を受け、修行者たちは改革に乗り出した。そこでは日本的な師弟関係が権力の偏りを生み出していると考えられ、より権力を分散させるために委員会が設けられ、選挙によって代表を選出するという「民主化」が行われた (Bell 2002 : 237)。同時に男女の不平等も問題視され、女性の地位向上の試みもなされた (Gross 1998 : 238-252)。同様の権力集中に対する批判はヨーロッパにおいても持ち上がっている。

現在では多くの団体がこれらの改革に従い、民主的な運営を行うとともに、倫理規定を設けるようになっている。日本の伝統を変えることへの反発も存在するが、伝統的システムで問題が発生し、それへの対応としてこのような改革が行われたことは、まさに宗教が社会の状況に適応していく例だといえるだろう。

(4) 日本国内の変化

これに対し日本国内においても、海外の状況を踏まえた変化が起きている。曹洞宗は 1993 年に SOTO 禅インターナショナルを組織し、海外開教についてのシンポジウムの開催、海外の禅仏教についての情報の配信を行っている。その会報には国外の禅指導者の声が寄せられ、国際布教の現状を知らせる役割を果たしている。その成果として、ヨーロッパ布教総監部の再開が行われるとともに、2007 年に宗制が変更され、これまでは僧堂で修行が行えなかった海外僧侶の位置付けが国内僧侶と同じになり、教師資格の取得が可能となった。教師資格取得のためには 3 ヶ月間開かれる「宗立専門僧堂」での一定期間の安居が必要となる。同時に、国際布教総監が僧籍主となることが可能となり、海外

での得度が行えるようになった（寺門興隆 2012：50）。

SOTO 禅インターナショナルは近年では「曹洞禅ネット」に場が移され、海外寺院の現況報告がなされている。さらに 1997 年には「曹洞宗北アメリカ開教センター」が開設、2002 年には「曹洞宗国際センター」に名を変え、2011 年に初の国際シンポジウムを開催した。同シンポジウムでは 4 地域の国際布教総監が初めて一堂に会し、現状を伝えるとともに今後の展開が話し合われた（中外日報 2011/10/8：4）。国際布教総監部では、2009 年にヨーロッパ総監部の総監にイタリア人のフォルザーニ慈相が、2010 年には北米総監部総監に米国人のルメー大岳が現地人として初めて就任し、国際化が進んでいる（仏教タイムス 2010/4/15：3）。

近年の国際的な活動をいくつか取り上げると、熊本県の聖護寺では、外国人向けの修行コースである国際安居が継続して行われている。2010 年からは英語を用いる「宗立専門僧堂」を期間限定で設置し、海外からの修行者を集めるという形を取っている⁹⁾。またヨーロッパに続き、米国にも専門僧堂を設置すべく、2022 年を目処に「天平山菩提心寺」の建立事業が進められている¹⁰⁾。さらに 2016 年からは、東京の曹洞宗檀信徒会館において、英語の坐禅会「Zen class」が開始された。それに伴い、外国語による教化資料の発行も行われている¹¹⁾。2017 年には東洋大学東洋学研究所に「国際禅研究プロジェクト」が設置され、翌年には駒澤大学禅研究所と共同で、第 1 回道元研究国際シンポジウムを開催し、世界各国から研究者が招かれた（中外日報 2018/8/8：4）。

他方で臨済宗および黄檗宗は、1979 年に曹洞宗と共同で開始されたカトリックとの東西靈性交流をはじめとする文化交流にとりわけ力を注いでいる。妙心寺派常德寺住職の宝積玄承はこの靈性交流をきっかけとしてヨーロッパで座禅指導を行うようになり、彼の指導の下 1990 年にはドイツに正宝寺が、2001 年にはメキシコにテオティワカン禅堂が開かれた（中外日報 2001/10/14：12）。また 21 世紀に入ってからは、臨済宗黄檗宗連合各派合議所や日中韓国際仏教交流協議会、日中臨黄友好交流協会の主催による中国・韓国との禅文化交流会やシンポジウムが多数開催されている。臨黄合議所が運営するサイト「臨黄ネット」は海外での禅の関心の高まりを受け、英語版サイトを 2006 年に開設している。国際的な禅の実践も増えつつある。宝積住職による京都国際禅堂

に加え、臨済宗建仁寺派神勝禅寺にも国際禅堂が存在するほか、2008年には臨済宗妙心寺派春光院で各国から参禅者が集まる「英語で座禅」が初めて開催された（文化時報 2008/6/25：2）。韓国曹溪宗系の高麗寺でも2012年に国際禅堂が設立された（中外日報 2012/1/24：3）。また2013年には曹洞宗大乘寺に宗派を超えて各国から参禅者を募る「世界禅センター」が開かれている（仏教タイムス 2013/6/20：5）。近年の活動では、臨済宗妙心寺派曹源寺の原田正道による「ワン・ドロップ・ゼン」のグループの広がりが目覚ましく、彼の指導を受けた僧侶は米国やドイツ、北欧で十数ヶ所の寺を開いている。

おすび

本稿では、国外での禅仏教の広まりの歴史と現状を、実践者の出自や、持ち込まれ方の差異を考慮しながら記述を行った。以上の内容を踏まえれば、なぜ「Zen」の語が質素や調和的、ゆったりしたといった意味を持つようになったのかも理解できるだろう。この言葉は、さまざまな過程を経て、禅と結び付けられた多くの要素を吸収して豊かに膨らんでいったのである。同時に禅仏教もまた、日本由来の宗教が大きく形を変えながらグローバル化している好例であることも疑いない。本稿が提示したのはそのようなグローバル宗教の概観にすぎず、禅を広めるのに貢献した個々の人物の背景や各地での実践の状況、日本の現状との比較など、さらに行うべき研究は多数残されている。本稿が、西洋仏教という広大な領域への関心をもたらすきっかけとなれば幸いである。

参考文献

- Asai, Senryō and Duncan Ryūken Williams, 1998, "Japanese American Zen Temples: Cultural Identity and Economics," In Duncan Ryūken Williams and Christopher S. Queen eds., *American Buddhism: Methods and Findings in Recent Scholarship*, Richmond: Curzon Press.
- Batchelor, Stephen, 2011, *The Awakening of the West: The Encounter of Buddhism and the West*, Williamsville: Echo Point Books and Media.
- Baumann, Martin, 2001, "Global Buddhism: Developmental Periods, Regional Histories, and a New Analytical Perspective," *Journal of Global Buddhism*, vol. 2.

- Baumann, Martin, 2002, "Buddhism in Europe: Past, Present, Prospects," In Charles S. Prebish and Martin Baumann eds. *Westward Dharma: Buddhism beyond Asia*, Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Bell, Sandra, 2002, "Scandals in Emerging Western Buddhism," In Charles S. Prebish and Martin Baumann eds. *Westward Dharma: Buddhism beyond Asia*, Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Coleman, James William, 1998, "The New Buddhism: Some Empirical Findings," In Duncan Ryūken Williams and Christopher S. Queen eds. *American Buddhism: Methods and Findings in Recent Scholarship*, Richmond: Curzon Press.
- Fields, Rick, 1992, *How the Swans Came to the Lake*, 3rd ed. Boston: Shambhala Publications.
- Gross, Rita M., 1998, "Helping the Iron Bird Fly: Western Buddhist Women and Issues of Authority in the Late 1990s," In Charles S. Prebish and Kenneth K. Tanaka eds. *The Faces of Buddhism in America*, Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Irizarry, Joshua A., 2015, "Putting a Price on Zen: The Business of Redefining Religion for Global Consumption," *Journal of Global Buddhism*, vol. 16.
- Layman, Emma McCloy, 1976, *Buddhism in America*, Chicago: Nelson-Hall.
- Obadia, Lionel, 2002, "Buddha in the Promised Land: Outlines of the Buddhi Settlement in Israel," In Charles S. Prebish and Martin Baumann eds. *Westward Dharma: Buddhism beyond Asia*, Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- McMahan, David L., 2002, "Repackaging Zen for the West," In Charles S. Prebish and Martin Baumann eds. *Westward Dharma: Buddhism beyond Asia*, Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Morreale, Don, 1998, *The Complete Guide to Buddhist America*, Boston: Shambhala Publications.
- Nattier, Jan, 1998, "Who Is a Buddhist? Charting the Landscape of Buddhist America," In Charles S. Prebish and Kenneth K. Tanaka eds. *The Faces of Buddhism in America*, Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Niculescu, Mira, 2015, "Mind Full of God: 'Jewish Mindfulness' as an Offspring of Western Buddhism in America," In Scott A. Mitchell and Natalie E.F. Quli eds. *Buddhism Beyond Borders: New Perspectives on Buddhism in the United States*, New York: State University of New York Press.
- Prebish, Charles S., 1979, *American Buddhism*, North Scituate: Duxbury Press.

- Prebish, Charles S., 1998, "Introduction," In Charles S. Prebish and Kenneth K. Tanaka eds. *The Faces of Buddhism in America*, Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Rocha, Cristina, 2006, *Zen in Brazil*, Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Taylor-Kabbaz, Amy, 2012, "Zen @ home," *WellBeing*, Universal Magazines, vol.138.
- Tweed, Thomas A., 1999, "Night-Stand Buddhists and Other Creatures: Sympathizers, Adherents, and the Study of Religion," In Duncan Ryūken Williams and Christopher S. Queen eds. *American Buddhism: Methods and Findings in Recent Scholarship*, Richmond: Curzon Press.
- Tworkov, Helen, 1994, *Zen in America: Five Teachers and the Search for an American Buddhism*, New York: Kodansha International.
- 五十嵐卓三、2005、「キリスト教信仰圏と禅—ヨーロッパ伝道に思う—」、『SOTO 禅インターナショナル』、29号。
- 岩本明美、2010、「アメリカ禅の誕生—ローリー大道老師のマウンテン禅院—」、『東アジア文化交渉研究 別冊』、6号。
- 寺門興隆、2012、「各宗派に聞くいま海外布教で寺院や僧侶は増えているのか」、『月刊住職』、興山社、7月号。
- SOTO 禅インターナショナル、2008、「パネルディスカッション『世界の曹洞禅—禅の果たす役割』（抄録）』、『SOTO 禅インターナショナル』、38号。
- SOTO 禅インターナショナル編、2014、『曹洞宗海外日系寺院史』、SOTO 禅インターナショナル事務局。
- ケネス・タナカ、2010、『アメリカ仏教』、武蔵野大学出版会。
- 常光浩然、2009、「北米仏教史話：日本仏教の東漸」『仏教海外開教史資料集成 北米編』、不二出版。
- 吉田宏得、2009、「【帰国報告】ハワイの布教に携わって（2）」、『SOTO 禅インターナショナル』、41号。
- 『週刊仏教タイムス』、仏教タイムス社。
- 『中外日報』、中外日報社。
- 『文化時報』、文化時報社。

注

- 1) <http://www.zcla.org/Programs/Curriculum/documents/TheZCLACurriculumfinal-wordversionJuly132012.pdf> 2018年11月14日閲覧。
- 2) <http://www.greenriverzen.org/special-events.html> 2018年11月14日閲覧。
- 3) <https://www.zen-azi.org/en/activities-gendronniere> 2018年11月14日閲覧。
- 4) <https://www.sotozen.cz/en/centres/prague/zazen-in-a-doju/> 2018年11月14日閲覧。
- 5) http://onedropzen.org/community/germany/hokuozan_sogenji 2018年11月14日閲覧。
- 6) <http://www.pewforum.org/religious-landscape-study/> 2018年11月14日閲覧。
- 7) ただしここで田中は仏教徒の数を300万人と見積もっているので、223万人という統計を採用するならばそれ以下とされる「同調者」の推計も下方修正すべきだろう。
- 8) <http://www.zencenterathens.com/en/> 2018年11月14日閲覧。
- 9) <https://www.sotozen-net.or.jp/syumucyo/20110926-1.html> 2018年11月14日閲覧。
- 10) https://www.sotozen-net.or.jp/column/ki_201711.html 2018年11月14日閲覧。
- 11) https://www.sotozen-net.or.jp/column/ki_201607.html 2018年11月14日閲覧。